

016

日蓮大聖人御書全集

しゅしじんごしょ

主師親御書

新版
319
325

しゅししんごしょ

主師親御書

建長7年('55) 34歳さい

しゃかぶつ

われ

しゅ

し

おや

いちにん

釈迦仏は、我らがためには、主なり、師なり、親なり。一人

あみだぶつ

われ

いぢにん

してすくい護ると説き給えり。阿弥陀仏は、我らがために

あみだぶつ

われ

てんだいだいし

は、主ならず、親ならず、師ならず。しかれば、天台大師こ

てんだいだいし

われ

ほとけべつ

れを釈して曰わく「西方は仏別にして縁異なり。仏別な

えんこと

われ

ほとけべつ

るが故に隠顯の義成ぜず、縁異なるが故に子父の義成ぜ

えんこと

われ

ごじょう

ず。またこの経の首末に全くこの旨無し。眼を閉じて

むねなまなこ

と

穿鑿せよ」と。

せんさく

まこと しゃかぶつ ちゅうてんじく じょうぼんだいおう たいし
実なるかな、釈迦仏は中天竺の淨飯大王の太子として、
十九の御年、家を出で給いて、檀特山と申す山に籠もらせ給
い、高峰に登つては妻木をとり、深谷に下つては水を結び、
難行苦行して御年三十と申せしに仏にならせ給いて
一代聖教を説き給いしに、上べには華嚴・阿含・方等・般若
等の種々の経々を説かせ給えども、内心には法華経を説
かばやとおぼしめされしかども、衆生の機根まちまちにし
て一種ならざるあいだ、仏の御心をば説き給わで、人の心
に隨い万の経を説き給えり。

しじゅうにねん

こころぐる

おぼ

かくのごとく、四十二年がほどは心苦しく思しめししか
ども、今、法華経に至つて、「我が願、既に満足しぬ。我が
ごとくに衆生を仏になさん」と説き給えり。久遠より已來、
あるいは鹿となり、あるいは熊となり、ある時は鬼神のた
めに食われ給えり。かくのごとき功德をば、法華経を信じ
たらん衆生は、「これ眞の仏子なり」とて、「これ実の我が
子なり。この功德をこの人に与えん」と説き給えり。これ
ほどに思しめしたる親の釈迦仏をばないがしろに思いなし
て、「ただ一大事をもつて」と説き給える法華経を信ぜざら

ひと

ほとけ

成

よ

よ

ここる

ん人は、いかでか仏になるべきや。能く能く心を
とど
留めて案すべし。

に まき い ひとしん

二の巻に云わく「もし人信ぜずして、この經を毀謗せば、

すなわ いっさいせけん ぶっしゅ だん ないしょきょう いちげ ほけきよう じゅ

則ち一切世間の仏種を斷ぜん乃至余經の一偈をも受けざ

もん こころ ほとけ

れ」と。文の心は、仏にならんためには、ただ法華經を受

じ ねが よきよう いちげいっく う くに きた さん

持せんことを願つて、余經の一偈一句をも受けざれと。三の

まき い う くに きた だいおう ぜん

巻に云わく「飢えたる国より来つて、たちまちに大王の膳に

あ い う くに きた だいおう ぜん

遇うがごとし」と。文の心は、飢えたる国より来つて、た

だいおう

ぜん

遭

ここる

いぬ

やかん

ここる

いた

ちまちに大王の膳にあえり。心は、「犬・野干の心を致す

とも、迦葉・目連等の小乗の心をば起こせざれ。破れた
る石は合うとも、枯れ木に花はさくとも、二乗は仏になる
べからず」と仰せられしかば、須菩提は茫然として手の一鉢
をなげ、迦葉は涕泣の声大千界を響かすと申して歎き悲し
みしが、今、法華経に至つて、迦葉尊者は光明如來の記別
を授かりしかば、目連・須菩提・摩訶迦旃延等は、これを見て、
「我らも定めて仏になるべし。飢えたる國より来つて、た
ちまちに大王の膳にあえるがごとし」と喜びし文なり。
我ら衆生、無始曠劫より已来、妙法蓮華経の如意宝珠を

かたとき　あいはな

むみょう　さけ

誑

ころも

片時も相離れざれども、無明の酒にたぼらかされて、衣の

うら　掛　知　すく　え　た　おも

裏にかけたりとしらずして、少なきを得て足りぬと思ひぬ。

なんみょうほうれんげきよう

とな　たてまつ

すみ

南無妙法蓮華経とだに唱え奉りたらましかば速やかに

ほとけ　な

しゅじょう

仏に成るべかりし衆生どもの、五戒十善等のわざかなる

かい

戒をもつて、あるいは天に生まれて大梵天・帝釈の身と成

おも

とき

ひと

う

もうもろ

つていみじきことと思ひ、ある時は人に生まれて諸の

こくおう

だいじん

くぎょう

てんじょうびととう

み　な

ほど

樂

国王・大臣・公卿・殿上人等の身と成つて、これ程のたの

おも

すく

え　た

おも

よるこ

しみなしと思ひ、少なきを得て足りぬと思ひ、悦びあえり。

ほとけ

ゆめ

なか

栄

幻

樂

これを仏は、「夢の中のさかえ、まぼろしのたのしみなり。」

ほけきょう　たも　たてまつ　すみ　ほとけ　成　と
ただ法華経を持ち奉り、速やかに仏になるべし」と説き
たま 給えり。

また、四の巻に云わく「しかもこの経は、如來の現に在
しよらい　げん　いま
おんしつおお　い
すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」云々。
きよう

しゃかぶつ　めつど　のち
おんしつおお　まご
じょうぼんおう　ちやくし
じゅうぜん
釈迦仏は、師子頬王の孫、淨飯王には嫡子なり。十善の
くらい　捨　びによ　やしゆだらによ

位をすて、五天竺第一なりし美女・耶輸多羅女をふりすて

じゅうく　つと　おこな　たま
おんとししゅつけ　さんじゅう　おんとし

て、十九の御年出家して勤め行い給いしかば、三十の御年

じょうどう　おわ　さんじゅうにそはちじつしゅこう　おんかたち
とき　た　さんじゅう　みゆき

成道し御坐しまして、三十一相八十種好の御形にて、御幸

だいぽんてんのう　たいしゃくそ　た　たもん　じこくとう

なる時は、大梵天王・帝釈左右に立ち、多聞・持國等の

してんのうせんごいによう

ほう

と

たも

おんとき

しへんはつとん

せっぽう

四天王先後因縁せり。法を説き給う御時は、四弁八音の説法

ぎおんしようじや み

さんちごげん とく

しかい 敷

は祇園精舎に満ち、三智五眼の徳は四海にしけり。しかれ

ひと ほとけ にく

ば、いずれの人か仏を悪むべき。なれども、なお怨嫉する

おお

めつど

のち いちごう

ぼんのう

だん

すこ つみ

もの多し。まして滅度の後、一毫の煩惱をも断ぜず少しの罪

わきま

ほけきょう

ぎょうじや にく

そね

ものおお

をも弁えざらん法華経の行者を惡み嫉む者多からんこと

うんか

み

は、雲霞のごとくならんと見えたり。しからば則ち、末代

あくせ

きよう

と ひと

かたきおお

と

悪世にこの経をありのままに説く人には敵多からんと説

そうちろう

せけん

ひとびと

われ たも

われ よ

たてまつ

かれて候に、世間の人々、我も持ちたり我も読み奉り

ぎよう そうちろう

かたき

ほとけ

そらごと

ほけきょう

まこと

行使じ候に、敵なきは、仏の虚言か、法華経の実なら

ざるか。また実の御経ならば、当世の人々、経をよみま
いらせ候は虚よみか、実の行者にてはなきか、いかん。
能く能く心得べきことなり。明らむべきものなり。
四の巻に、多宝如来は、釈迦牟尼仏御年三十にして仏に
成り給うに、初めには華厳経と申す経を実報華王のみぎり
にして、別円頓大の法輪、法慧・功德林・金剛幢・金剛藏の
四菩薩に対して三七日の間説き給いしにも來り給わず。そ
の二乗の機根叶わざりしかば、瓔珞細軟の衣をぬぎて、
麤弊垢膩の衣を着、波羅奈国鹿野苑に趣いて、十二年の
そへいくに ころも き はらなこくろくやおん おもむ
じゅうにねん

あいだしようめつしたい ほうもん と たま

あにやくりんとう ごにん

間生滅四諦の法門を説き給いしに、

阿若俱隣等の五人

しようか

証果し、八万の諸天は無生忍を得たり。

次に欲・色二界の

ちゅうげん

だいほうぼう ぎしき

じょうみよう おんしつ

さんまんにせん とこ

つき よく しきにかい

中間

はんにや びやくろち ほとり

じゅうろくえ ぎしき

じんじょうこゆう むね

さんまんにせん とこ

た

十六会の儀式、淨名の御室には三万二千の牀を立

て、般若・白鷺池の辺、十六会の儀式、

尽淨虛融の旨をの

いち まきないしし まき

はじ きた たま

ほけきよう

ほうとうほん いた

はじ きた たま

べ給いしにも來り給わづ。法華経にも、一の卷乃至四の卷の

にんきほん きた たま

法華経にも、一の卷乃至四の卷の

人記品まで來り給わづ、宝塔品に至つて初めて來り給え

り。

しやかぶつ

さきしじゅうよねん きよう

われ そらごと

おお

釈迦仏、先四十余年の経を我と虚事と仰せられしかば、

ひともち ほけきよう しんじつ と

たま

人用いることなく、法華経を真実なりと説かせ給えども、

ひともち ほけきよう しんじつ と

たま

「仏」というは無虚妄の人とて永く虚言し給わざと聞きしに、一日ならず一日ならず、一月ならず二月ならず、一年にねん 二年ならず、四十余年の程まで虚言したりと仰せられしかば、またこの経を実と説き給うも、虚言にやあらんずらん」と不審をなししかば、この不審、釈迦仏一人しては、舍利弗を始め、事はれがたかりしに、この多宝仏、宝淨世界よりはるばると來らせ給いて、「法華經は、皆これ眞実なり」と証明し給いしに、先の四十余年の経を虚言と仰せらるること、実の虚言に定まるなり。

また、法華經より外の 一切經を空に浮かべて、文々句々、
阿難尊者のごとく覺り、富樓那の弁舌のごとくに説くとも、
それを難事とせず。また、須弥山と申す山は、十六万八千
由旬の金山にて 候を、他方世界へつぶてになぐる者あり
とも、難事には候わじ。仏滅度して後、当世・末代悪世に
法華經をありのままに能く説かん、これを難しとすと説か
せ給えり。五天竺第一の大力なりし提婆達多も、長三丈
五尺、広さ一丈二尺の石をこそ仏になげかけて候いしか。
また漢土第一の大力、楚の項羽と申せし人も、九石入りの釜

みずみ そうら

提 そうら

に水満ち候いしをこそひさげ候いしか。それにこれは、
「須弥山をばなぐる者は有りとも、この経を説のごとく読
み奉らん人は有りがたし」と説かれて候に、人ごとに
この経をよみ書き説き候。経文を虚言に成して、当世の
人々を皆法華経の行者と思うべきか。能く能く御心得あ
るべきことなり。

五の巻の提婆品に云わく「もし善男子・善女人有つて、妙
法華経の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して、疑惑を
生ぜずんば、地獄・餓鬼・畜生に墮ちずして、十方の仏前
しお

しょう

ほん

ふた

だいじ

に生ぜん」と。この品には二つの大事あり。

いち

だいばだつた

もう

あなんそんじや

あに

こくぼんおう

一には、提婆達多と申すは、阿難尊者には兄、斛飯王に

ちゃくし し しきょうおう

まご ほとけ

従兄弟

は嫡子、師子頬王には孫、仏にはいとこにありしが、仏

いちえんぶだいだいいち

どうしんじや

あだ

は一闇浮提第一の道心者にてましましに、怨をなして、

われ えんぶだいだいいち じやけん ほういつ もの

かた ほとけ あだ

「我はまた闇浮提第一の邪見・放逸の者とならん」と誓つ

よろず あくにん かた

ほとけ

あだ

て、万の悪人を語らつて仏に怨をなして、三逆罪を作し

げんしん だいちわ

かた

むけんだいじょう お

そうちら

てんのう な

て、現身に大地破れて無間大城に墮ちて候いしを、天王

によらい もう きべつ さず

ほん

そうちらう

如來と申す記別を授けらるる品にて候。しかれば、善男子

もう

おとこ

きょう

しん

と申すは、男この経を信じまいらせて聴聞するならば、

ちようもん

だいばだつたほど

あくにん

ほとけ

成

まつだい

ひと

提婆達多程の悪人だにも仏になる。まして末代の人は、た

じゅうざい

たぶん

じゅうあく

過

ふか

たも

とい重罪なりとも、多分は十惡をすぎず。まして深く持ち

たてまつ

ひと

ほとけ

奉る人、仏にならざるべきや。

に

二には、娑竭羅竜王のむすめ竜女と申す八歳の

蛇

ほとけ

な

ほん

そうちろう

りゆうによ

もう

はっさい

くちなわ、仏に成りたる品にて候。このことめずらしく

たつと

そうちろう

ゆえ

けごんぎょう

によにん

じごく

じごく

貴きことにて候。その故は、華嚴經には「女人は地獄の

つか

よ

しゅし

た

げめん

ぼさつ

に

ないしん

使いなり。能く仏の種子を断つ。外面は菩薩に似て、内心

やしゃ

もん

こころ

によにん

じごく

つか

は夜叉のごとし」と。文の心は、女人は地獄の使い、よく

ほとけ

たね

断

げめん

ぼさつ

に

ないしん

やしゃ

仏の種をたつ、外面は菩薩に似たれども、内心は夜叉のご

ひとたびによにん み もの
い
としと云えり。また云わく「一度女人を見る者は、よく眼
くどく うしな
の功德を失う。たとい大蛇をば見るとも、女人を見るべか
くどく
らづ」と云い、またある経には「あらゆる三千界の男子の
もうもろ
諸の煩惱を合わせ集めて、一人の女人の業障となす」と。
ぼんのう
あ
あつ
きょう
さんぜんだいせんせかい
三千大千世界にあらゆる男子の 諸の煩惱を取り集めて
い
なんし
い
によにん
ごうしよう
さんぜんかい
なんし
三
よにんいちにん
つみ
い
な
によにん
ぼんのう
と
あつ
女人一人の罪とすと云えり。ある経には「三世の諸仏の眼
によにん
ほとけ
な
さんぜ
しょぶつ
まなこ
は脱けて大地に墮つとも、女人は仏に成るべからず」と説
ぬ
だいち
お
によにん
ほとけ
な
き給えり。しかるに、この品の意は、人・畜をいわば畜生
たま
ちく
ちくしょう
たま
りゅうによ
ほとけ
な
われ
かた
たる竜女だにも仏に成れり。まして我らは形のぞとく

にんげん かほう か かほう 勝 ほとけ
人間の果報なり。彼の果報にはまされり。いかでか仏にならざるべきやと思しめすべきなり。

おぼ なか さんあくどう さうろう
中にも、「三悪道におちず」と説かれて 候。

じごく もう はつかん はちねつ ないしほちだいじごく なか はじ
その地獄と申すは、八寒・八熱、乃至八大地獄の中に、初

あさ とうかつじごく たず いちえんぶだい したいつせんゆじゅん ほね
め浅き等活地獄を尋ぬれば、この一閻浮提の下一千由旬な

なか ざいにん たが つね がいしん
り。その中の罪人は、互いに常に害心をいだけり。もした

あいみ りょうし しか おのおのくろがね つめ
またま相見れば、獵師が鹿にあえるがごとし。各々 鉄の爪

たが 摦 裂 けつにくみなつ のこ ほね
をもつて、互いにつかみさく。血肉皆尽きて、ただ残つて骨

ごくそつ ぼう こうべ 裏 いた
のみあり。あるいは獄卒、棒をもつて頭よりあなうらに至

るまで皆打ちくだく。身も破れくだけて、なお沙のみなうとし。
焦熱しようねつなんど申すは、譬えんかたなき苦くわいなり。鉄城四方に回
つて門を閉じたれば、力士も開きがたく、猛火高たかくのぼつ
て金翅みゆうかたかのつばさもかけるべからず。

碎すな 翼わ 翔あ

餓鬼道がきどうと申すは、その住処に二つあり。一には地ちの下した
五百由旬ごひやくゆじゅんの閻魔王宮えんまおうぐうにあり。二には人天にんてんの中なかにもまじわれ
り。その相そう、種々じゅじゅなり。あるいは腹はらは大海たいかいのごとく、のんど
は鍼はりのことくなれば、明けても暮くれても食じきすともあくべか
らず。まして五百生・七百生など飲食おんじきの名なをだにもき

聞き

かず。あるいは己おのれが頭こうべをくだきて脳なづきを食するもあり、あるいは一夜に五人の子いちや ごにんを生んで夜の内こゝうに食するもあり。
万菓ばんか、林はやしに結むすべり。取とらんとすれば、ことごとく剣つるぎの林はやしとなり。万水ばんすい、大海たいかいに流れ入りぬ。飲ながまんとすれば、猛火ひのうかと免くわんなる。いかにしてか、この苦じゆうをまぬかるべき。

次に畜生道ちくしょうどうと申すは、その住所じゆうしょに二つあり。根本ふたは大海かいに住す。枝末じゅうしょは人天じんてんに雜まじわれり。短みじかき物ものは長ながき物ものにのまれ、小さき物ものは大なる物ものに食たがらわれ、互あいいに相食うはんでしばらくもやすむことなし。あるいは鳥獸ちようじゆうと生まれ、あるいは休くわん

は牛馬と成つても重き物をおおせられ、西へ行かんと思え
ば東へやられ、東へ行かんとすれば西へやらる。山野に多
くある水と草をのみ思つて、余は知るところなし。

しかるに、善男子・善女人、この法華経を持ち、
南無妙法蓮華経と唱え奉らば、この三罪を脱るべしと説
き給えり。何事か、これにしかん。たのもしきかな、たの
もしきかな。

また、五の巻に云わく「我是大乗の教えを闡いて、苦の
衆生を度脱せん」と。心は、「われ大乗の教えをひらい
しゅじょう どだつ こころ 我 おし ひら く

て」と申すは、法華經を申す。「苦の衆生」とは何ぞや。地獄の衆生にもあらず、餓鬼道の衆生にもあらず、ただ女人を指して、「苦の衆生」と名づけたり。五障・三従と申して、三つしたがう事有つて、五つの障りあり。竜女、「我、女人の身を受けて、女人の苦をつみしれり。しかれば、余をば知るべからず、女人を導かん」と誓えり。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

日蓮 花押